

# 東日本大震災とその後の子どもたちを

## 支えている人たちインタビュー

### 第9回（前編）

#### ◎支えている人／話し手

鈴木みなみさん、小林奈保子さん（いわき・双葉の子育て応援コミュニティ cotohana）

2019年より福島県双葉郡、いわき市で、子どもたちと子育て世帯を応援する・応援し合うコミュニティづくりを行っている。「ここで子育てしてよかった」「ここでこども時代を過ごせてよかった」そんな声が聞こえてくる地域を目指している。

日野涼音さん、横山沙織さん（認定NPO法人底上げ）

東日本大震災直後に宮城県気仙沼市で活動開始。東北の高校生が“自分のやりたいこと”と“地元のためにできること”を考え行動をおこすサポートや、人材育成などを行っている。2022年より、福島県双葉郡楡葉町で「ならばこどものあそびば」を開いている。

（以下敬称略）



左より、横山さん、日野さん、小林さん、鈴木さん

#### cotohana の由来とはじまり

— cotohana の由来から教えていただけますか？

【鈴木】コトハナの“コ”は、ko じゃなくて co なんです。co は協力している状況を示して、hana は子どもたちの成長を、花の成長、植物の成長と重ねています。to は、子どもたちの成長を地域で協力していきましょう、ということを表しています。活動を始めた頃から、地域のみんで協力して子どもたちの育ちを応援したいなという思いがありました。子育て支援ではなく、子育て応援や子どもたちの育ちの応援を通じて地域づくりをしていく、というのが私たちの活動の根本にあります。活動地域は福島県双葉郡の8つの町と村、全域を対象にしています。この地域で子育てしていてよかったなという実感を持てるような地域にしていきたいという思いで活動を始めました。また、活動を重ねていく中で、保護者だけの目線ではなく、こども目線でこの地域でこども時代を過ごせてよかったと思えるような地域づくりをしていきたいとも思い始めました。

— 活動を始めた経緯を教えてください。

私は山形出身で震災後に京都の大学に進学し、休学して福島に来ました。2013～15年頃、福島のこどもたちと静岡にある自然学校に行き一緒に遊ぶという保養キャンプの活動に参加していました。大学を卒業して福島に移ってきて、結婚してこどもが生まれたのをきっかけに、双葉郡の避難指示が解除されていく地域で子育てしていく人たちの応援をしていきたい、自分も母親になったからこそ、支援という立場ではなくて、共に考えていく仲間として何かできるのではないかという想いで活動を立ち上げました。震災由来の課題も多く残る地域で、子育てしよさ、暮らしよさを阻むような地域課題も未だある状況なので、そういったものを解決したり乗り越えたりする力が必要で、お父さんお母さんたちと一緒に考えていく仲間になれたらと思っています。もうひとつ、まずは自分たちが楽しいと思える時間をひとつずつ積み重ねていくことができれば、という想いで活動づくりをしています。富岡町の避難指示が解除されていなかった2018年頃、近隣市町村であるいわき市や郡山市に避難しているお父さんお母さんたちのヒアリングをしたり居場所づくりをしたりということを重ねて、双葉郡で活動を始めたのは2019年からです。

— おふたりが出会ったのはいつ頃ですか？

**【小林】** 2017年頃、私が浪江町に引っ越して、女子会をやりたくて浜通りで知っている女子たちに声をかけた場所に、鈴木さんが参加してくれました。その前にも会ってはいましたが、話をして意気投合したのはその頃です。

— なるほど。そこから、cotohanaを作ろうよ、という流れですか？

**【鈴木】** cotohanaは2019年に私が立ち上げて、小林が後から加わり、現在は共同代表として活動しています。小林は浪江町に住んでいて、こどもがいます。私は富岡町に住んでいて、今年6歳になる娘がいます。私たちの共通しているところは、自分たちの生活が楽しくなることを念頭に置いていて、仕事でやっているというよりはライフワークの一環というところだと思います。そのあたりが意気投合したポイントかもしれないです。

— 双葉郡の子どもたちについても教えてください。

**【鈴木】** まず数から見ていくと、避難指示が解除された地域でこども園が再開して、避難指示解除から年を重ねるごとに児童数は順調に増加し、1年半くらいで約1.4倍に増えていきます。避難指示が解除される前から、保健師さんや町の福祉課さんにヒアリングしてきた感触では、行政が考えていなかったスピードでこどもたちが町に戻ってきていると感じています。特に浪江町と富岡町は2017年に避難指示が解除して、浪江は2018年に、富岡は2019年にこども園が再開したのですが、飛躍的に数が伸びています。ただ、児童のルーツをみると町村ごとにばらつきがありまして、早めに避難指示が解除された檜葉町は、元々檜葉町で暮らしていたこどもたちが8割を超えていますが、富岡町は完全に数が逆転していて、新規転入したこどもたちが7～8割を占める状況となっています。富岡町が復興の最前基地になっていて、仕事関係で転入されてくる方が多いため、元々の富岡町に暮らしていた方よりも新規転入の方が増えているという状況です。ただ、後から解除された町はどこもそうなのかというところ…同じ2017年に避難指示が解除された浪江町は、町出身の方は7割超くら

いですかね。

【小林】昨年度までは7割くらいが浪江町出身の方でしたが、今年度は新規転入が増えてきて、5対5くらいの割合にはなってきました。しかし、子育て世代の中でも、元々暮らしていた方や浪江町出身の方が最初に戻ってきたというのが特徴的でしたね。

【鈴木】こういった形で子どもたちや保護者のルーツが町村ごとによってばらつきはあるんですけど、共通しているところとしては、震災後のブランクがあったので同じ町出身とはいえ親同士のつながりは希薄で、さらに新規転入者の方たちの中には親族が近くにいるという方も少ないので、孤立して子育てをしている状況です。

### コトハナの活動について

ー 現在の活動について教えてください。

私たちの活動は大きく6つありまして、1つ目が、ママカフェというお母さんたちの居場所づくりの事業、2つ目に冒険ひろば、3つ目は、とみおか子ども食堂とって富岡町内で子ども食堂をやっています。4つ目に、webメディアの運営と情報誌の発行をしています。5つ目は、ふくしま子ども食堂ネットワークという全県のネットワークの事務局です。浜通り地域で子ども食堂のようなこどもの居場所が少ないので、そういった居場所を増やしていくということを目的にコーディネーターをしています。それを担当するのがこの3人（鈴木、小林、横山）になります。6つ目は、双葉郡で七五三をするご家族を応援したいなという想いで、「ふたばで七五三お祝いプラン」という企画を打ち出しています。

ー 一番始めは、どんな活動から始まったのでしょうか？

【鈴木】最初に始めたことは、情報収集と発信です。自分たちも双葉郡で子育てするという時に一番不安だったのは情報が少ないことでした。子ども関係のサービスがないわけではないのですが、2017、18年くらいの時はインターネットで調べても震災前の情報が出てくるくらい、情報を得ることが難しい状況でした。なので、サービスを必要としている世帯とマッチングしていけるように、情報収集と発信を始めることにしました。また、子育て世帯の方たちに集まっていたら、どんな情報があると嬉しいですかなど、いろいろな話をお伺いするというのを年に一回やっています。2019年に、双葉郡で暮らしていてどんなこと困っているの？ということ聞いた時は、医療面の不安、子ども用品の買い物をするとこころがない、おでかけどこに行ったらいいのかな、ということの他に、遊び場や子どもと一緒におでかけできる場所ってあるのかな、ということがたくさん挙がっていました。今はそこから少しずつ変化していて、2021年には新しい情報として、習い事とかはあるのかな、とか、子ども園が再開しているけれどどういった様子なんだろう？ということ、あとは地域と子どもたちとのつながりがない、家族単位での子育てになってしまっているのか地域の人とつながれるような場所があるのか、園以外で子どもたちを中心にしたお付き合いみたいなものがあるのか、パパママ同士のコミュニティがあったらいいな、などの声が上がっています。そんな声に基づいて、情報誌とwebでの情報発信をしています。

ー 冒険ひろばは、どんな経緯で始まったのでしょうか。

**[鈴木]** まず背景として、お父さんお母さんたちから挙がっていた声の中に、こどもたちをどこで遊ばせたらいいかわからないという漠然な不安感みたいなものや困りごとみたいなものがありました。その気持ちには様々な要因があると感じています。実際にこどもたちが外で遊んでいる、歩いているような姿はほとんど見ないような状況なんです。通学がスクールバスということもあります。私たちも、こどもたちが地域の中で自由にのびのび遊ぶ姿を見たいという想いはあったので、冒険ひろばというイベント型の場所を始めることにしました。冒険ひろばを通じて、親もこどもたちの遊びのサポートができて、こどもたち自身が身の回りのものに興味や関心を持って自然に遊び始めるという力を取り戻してもらえたらと思っています。

ー どんな場所で、どのくらいの頻度で開催しているのですか？

場所は迷いながら選定してしまっていて、ひとつめのハードルとしては線量ですかね。この事業は県の事業の一端であるため、県で定められている線量をクリアすることが第一条件です。今は富岡町内にある、広くて遊具が何もない運動公園みたいなところに遊具を持って行って遊んでいます。もう一か所は、富岡町の西側にある自然豊かな川内村に、自然体験ができる場所があり、そこの広場をお借りしながら開催しています。

開催は年間4回です。去年は3か月に1回という形でやっていたんですけど、寒い時期の参加は難しいという状況がわかってきたので、今は春から秋までの間で4回開催することに。少ない時でこどもが15名くらい、多いと30名くらい参加しています。この数字が多いか少ないかというところは、私たちも客観的に判断できていないのですが、来ていただいている方たちからは、こういう場所があるとこどもたちを外で遊ばせてみようと思うけど、普段の日常生活の中で、こどもたちを遊ばせるということができていないということに気づくという声をいただいています。

ー 来る子どもたちは、リピーターの子たちが多いのか、毎回わりと顔ぶれが違うのか、というところはどうですか？

**[鈴木]** 昨年度はリピーターの子たちが多かったんですけど、今年は2か所でやっているんで、比較的新規の参加者の方たちも来ています。毎回半分以上は新規の方という形で顔ぶれが変わってきているかな、と感じています。年齢層は幼児が多いですが、それは私たちの取組みが未就学のこどもたち向けということもあると思います。

ー では親子で遊ぶのでしょうか？親はこどもの遊びにあまり介入しないで見ているっという感じですか？

**[鈴木]** 親が一緒についているということが多いです。2、3回目くらいのリピーターになってくると、スタッフも交えながら遊んでいるというような形です。必ずこどものそばに大人がいますね。今年度だと、ちいさな水場があるようなところでやったので、そこで水遊びをしたり、虫をつかまえたり。去年は落ち葉を集めて落ち葉プールみたいなところを作って遊ぶというようなことをしました。

— そういう遊びの中で、リピーターのこどもたちの姿に変化などを感じたりすることはありますか？

**【鈴木】**リピーターの方には変化がありますね。特に、うちのスタッフがこどもを連れて来ているんですが、目に見えて遊びが変わってきました。始めの頃はどう遊んでいいかわからないようでしたが、今ではダイナミックな遊びをしたり、遊びの提案があったりします。また、こどもだけじゃなくて親御さんたちの変化のほうが大きいなと感じています。こどもにずーっとべったりついているという状況から、こどもたち同士で遊んだり、いつも触れ合わない大人のスタッフと遊んだりというようなことを、親はすこし離れて見守るという形に変わってきていると思います。

**【小林】**慣れてきている人たちは、自分のこどもじゃなくてもほかの子をみながら遊んだりとか、そして自分のこどもは別の親子と遊んだりとか、関係というのがちょっとずつ見えてきたなあというのは、今年続けてやってみて現れた変化かなと思います。

**【鈴木】**そうですね、自分のこどもじゃない子と遊んでいる親の様子はよく見られます。

— そういうところから子育てサークルみたいなものが生まれる感じがしますね。

**【鈴木】**そうですね、実はねらいとしてはそういう子育て世帯間のサークルみたいなのができていくところが理想かなと思っています。というのも私たちが子育て応援を通じて地域づくりをしていきたいと言っているんですけど、必要な場所とかサービスを作り続けていくというのは団体の性質に合わないところがあります。なのでできるだけ活動を地域の人達に受け渡していく、手放していくということをしていきたいと思っています。親たちがエンパワメントされて、自主的なサークルとかができるのをねらってはいるんですけども、実際そこにはかなり遠いかなというのが印象です。一番の理由は、広域で開催しているので日常のお付き合いがない親御さんたちが多なことかなと思っています。

**【小林】**浪江町だったら浪江町の中に冒険ひろばがあって、浪江町のお父さんお母さんたち向けに周知ができてそこで集まったら、そのまま頻度高くお母さんたちも集まったりできると思うんですけど…町ごとに冒険ひろばのように自由に遊べるような場所がたくさん存在しているわけじゃないので、今年度のように富岡町、川内村と広域でやっているのと、どうしてもイベントに行く、というような感覚でお父さんお母さんたちも参加しているというような現状かなと思います。

## こどもの環境

— 先程お話に出たスクールバスについてお伺いしたいのですが、学校が始まったと同時にスクールバスの運用が始まったのでしょうか？

**【鈴木】**そうですね。学校は統廃合のような形になって、元々の通学圏内でないこどもたちもひとつの学校に集約される形になり、通学するには遠すぎるということで、スクールバスの導入をしています。ただ、ちょっとずつ変化はあります。

**【日野】**富岡町よりも2年早く避難指示が解除された楢葉町では、今年から半径1キロか

2キロ圏内の子たちだけ、スクールバスじゃなくて徒歩通学でもいいよ、という状況です。

〔鈴木〕徒歩通学できたらいいよね、という空気感はもちろんあるんですけど、実際はそういう状況にあります。

一 放課後というか、学校の帰り道に遊べないということですよ。

〔鈴木〕そうですね。家の前まで迎えに来て、学校の門の中までバスが入ります。こども同士の家が遠いということもあります。富岡町の場合、授業が終わったら20分後くらいにはバスが来るので、放課後の時間を友達同士で遊んで過ごすことはないという状況ですね。

〔小林〕浪江町では、統廃合して新しく作った小中学校の敷地内に、こどもたちのための放課後こどもクラブというクラブハウスを町が作りました。そこで1~6年生のこどもたちを18時まで預かって、宿題やったり遊んだり、というプログラムがあります。なのでスクールバスは、そこに行く子が乗るバス、行かない子が乗るバスと、何本か出ていると聞いています。それから中学生では環境的に自転車通学でも行きたいです、という子がひとり現れて、朝の景色が変わりました。チャリンコがいる！って、ちょっと感動しました、私。

〔鈴木〕自転車に乗っている子どもがいると、えっ！と驚きます。私は富岡町で見たのは一回だけです。本当にそれっきり。いたらびっくりします。

一 避難指示が解除されて生活は当然戻ってきていると思いますが、そうやって歩いている子や自転車の子が少ないというのは、こどもの数が少ないだけでなく、道路やいろんな環境にホットスポットが残っているという可能性はあるのでしょうか？

〔小林〕浪江町の場合は、元々線量が低かったので、ホットスポットという場所は山のほうとか、そういうところでした。話に聞くのは、トラックの往来がまだすごく多いので危ないことや、友達の家が遠いので自転車で遊びに行くところまで至らないということです。線量だけの問題じゃないとか。浪江町の場合はそんな感じです。

〔鈴木〕同じく富岡町もホットスポットが日常の行動範囲内であるかということ、除染も行われているため、基準値以上のところはないと思っています。私の自宅は帰還困難区域と呼ばれる場所から1キロくらいしか離れていないですが、町内の中で線量の高い低いということを見なさんが意識しているかということ、そうでもないなという風に感じています。いま小林さんからお話があったように、外遊びをする上で心配していることは、まずはトラックの交通量が多いということ。そして、富岡町の場合、現在町内居住者が1900人くらいいるんですけど、それを超える3000人以上の方が町に居住しているという点です。そのほとんどが復興作業に従事している方々であり、誤解のないようあえてお伝えすると、その方々が危害を加えるということはありません。一方で、「隣近所にどのような人が住んでいるかわからない」ということは、心配事として大きいと思います。

一 こども園などでは外遊びやおさんぽはされているのでしょうか？

〔小林〕浪江町は、こども園が一か所だけなんですけど、そこでは外遊びや散歩車使ったり自分たちの足でおさんぽしたりということは普通にしています。

〔鈴木〕富岡町も同じくです。線量の話が出てくるとすると、こどもたちが野菜を苗から

育てて収穫する、食べる、という時です。再開初年度の2019年の時は、園で育てた野菜は収穫しても食べませんという形で園から報告があったんですけど、翌年からは線量測って食べられる値だったのでおうちに持って帰らせます、食べるか食べないかはご家庭で判断してくださいという対応に変わってきています。そういう形でご配慮いただいています。

### 外遊びが足りていない

— こどもの育ちの中で、外遊びが足りていないとか、こどもの体や心の働きのなかで課題を感じるようなことはありますか？そこだけを取り出して考えることはそうはないかもしれないですけど、もしあれば教えていただきたいです。

[小林] どうしても運動不足で、福島県内はどこも肥満度が高い傾向になってきているという話はすごくよく聞きますし、親たちも家のまわり以外でこどもにどんどん遊んでほしいけど、どこで遊ばせていいのかわからない、という話もよく聞きます。それから、そういう場所を求めてはいるけれど、なかなかどうしていいかわからないという話も聞きます。あと私たちがどちらかというと山育ちなので、私たちが昔やっていたような外遊びって今全然できないなっていう感覚は持っているんですよ。本当はこどもとそういう遊びを、昔を思い出してやってみたいけど、どこでやろうかな、という感覚はちょっとあります。私個人として、当事者としてですけど。

[鈴木] 私も日常生活に外遊びが当たり前のようにない状況はすごく不自然に感じるので、冒険ひろばとかを作っているわけなんですけど、おそらくこどもたちや親御さんたちは、なくても別にいいやと思っているような状況もあるので、それ自体に課題を感じると言いますか、問題意識みたいなのは少なからず持っています。

— この辺り(富岡町)が震災の頃にどういう風になっていたかは全然わからないんですけど、今日来る時、最近建ったのか新しい家がけっこう多いのかなという気がしました。

[鈴木] 富岡町は人が住んでいない家はほとんど解体しているんで、今あるものは基本的に住んでいる、または残す意志がある方たちの持ち物で、手直しされたり新しく建てられたりされているものが多いと思います。ただ、風景として違うのは一軒家が多かったのが、今は集合住宅がほとんど新しくなった感じですよ。

— それ以外は草がたくさん生えていて…そこには元々は家があったのでしょうか？

[鈴木] 避難して、富岡町ではない場所で住んでいくということを決められて、家を解体されたところですね。解体するにも費用が補助される期限があったので、それまでに解体申請をされて壊されて、どんどんなくなっていきました。

— 外遊びのための場所探しに困っているというお話は、ここの風景からも感じ取れるように思います。物理的な土地はあるけれども、その使い方、活用が難しそうですね。

[鈴木] そうですね。手入れされていて、こどもたちに自由に遊んできていいよ、って安心して言える場所みたいなのは本当はない…少ないってよりないって表現のほうがいいくらいかもしれないですね。

【小林】浪江町の場合は、なくはないんですけど、今のこどもたちはそこで遊んだことがないので、知らない場所なんですよ。公園整備されたけれど使っていいのかな？みたいな。一方で、いま必死に整備している場所があります。すごくいい公園だったんですけど、ずっと線量が高くて、ずっと土を削って剥いていきます。東屋も新しく建て直したりして、なんとか線量を下げようということで、今年度中ずっと工事しています（2022年8月のインタビュー時には工事中、2022年度に整備完了、2023年度から利用可能となった）。

【鈴木】公園とか遊び場の整備はちょうどこれからというところですよ。医療機関や学校、保育施設の整備が進んで、公共施設が出来て、公園の着手が今からって感じですね。ただ、大きい公園の整備から始まって街中にある小さな公園はその後です。富岡町はおそらく小さい公園の着手は2026年からだったので、ゆっくりゆっくり進んでいますね。

— そういう中で遊び場を作られたのはすごいことですね。

【小林】ないからつくるっていうのはありましたよね。

【鈴木】暮らしはじめた頃はいわきとかに遊びに行っていました。買い物も、いわきや南相馬に出向かないとなかなか生活できないという状況もあるので、土日にこどもを遊ばせながら出かけますっていうことも多くて。そういうご家庭が多いかなと思います。今は町内で買い物場所が充実してきたので、じゃあできれば遊ぶのも町の中でできたらいいよねって考え方にシフトしてきているように思うんですけど。その考え方と町の中の遊び場の整備が並行して進んでいないというところはあると思います。

【小林】屋内遊び場に関しては先行して建てられていて、2021年3月に富岡町にひとつ、オープンしました。浪江町もつい先日オープンして。屋内で遊ぶというところに関しては、新しい施設が双葉郡、南相馬市でもけっこう増えてきています。

【横山】おそらく県の施策もあると思います。震災直後から屋内で遊ぶための大型遊具が巡回する事業を県内でやっていました。いわきの屋内遊び場は2012、13年くらいから、線量が気になる中でこどもの運動不足を解消するための屋内遊び場の整備だったので、今や古くなりましたが、屋内だけどしっきり体を動かせるような大型の遊具があります。私は仙台から引っ越して来たんですけど、なんでこんなにあるの？っていうくらいで、各自治体に一つずつくらい、浜通りだけじゃなくて中通りも含めて多いなというのは思います。

【小林】それはよく言われますね。

【鈴木】そういった状況を受けて、冒険ひろばでお父さんお母さんたちと意見交換した時には、屋内遊び場だとか遊具のある公園でしか遊べないこどもたちになってしまっているんじゃないかという意見が課題意識として出てきました。

— それは保護者の方がそう思っていたんですか？それとも、鈴木さんや小林さんが思ったんですか？

【鈴木】これを始めた時はまるっきり自分たちの思いでした。当時、2019年には屋内遊び場もまだなくて。屋内遊び場ができることや公園の整備が始まることは、ロードマップで示されてはいるんですけど、こどもの成長は待ったなしなので、整備を待っていただけで



した。こどもたちが遊びたいと思った時に、公園などの遊び場がなくても遊べるってどういう状況なんだろうと考えた結果、こどもたちが身の回りのことに興味持ったりそれを楽しんでいると思えたりして遊べる、という状況ができていったらいいなっていうところからがスタートでした。

— そう思えるのはすごいなと思うのですが、どうしてそう思えたのでしょうか？

**[小林]** 自分たちの幼少期の経験ですね。

**[鈴木]** 私は山間部で育って、公園とかも全くない、小学校も同級生4人くらいしかいない小さなところだったんですけど、そういう中でも学校の帰り道とかで道草しながら遊びを見つけて毎日楽しかったなって思い出だけはすごく強烈にあります。話を聞いていると小林さんと同じです、山の中でずっと遊んでいました。

**[小林]** 私も山の中で秘密基地作りを何度もチャレンジするっていうのはありましたし、その中で全然知らない地域の人と、お水飲ませてくださーい！って感じで関わってました。全然知らないおばあちゃんだけど、外の水道を借りてお水を飲ませてもらったり、そういう学校じゃないところの体験というか、思い出はすごく残っているんですよ。それが元にあるので、今それが無い状態に違和感がある状況です。

— それは自分の子育ての、自分のお子さんに対してのこどもの育ちっていうところに対してでしょうか？

**[鈴木]** できたらそういう風なことを体験してほしいというか、そういったことも抵抗なく楽しめるようになってほしいという想いはありますね。

— その想いがあって、冒険ひろばづくりにつながったのですね。

**[鈴木]** そうですね、そこにつながっています。

**[小林]** 座談会を開催した時に、お母さんたちからも同じような話が出ました。こどもがYoutubeで昆虫とかを見ているから、じゃあ外に行って実際に探してみよう、とか、親御さんの働きかけでやっているけど、本当はもっと、ほかのお友達とも一緒に家の周りじゃないところで探してみたいとか、そういうお話が挙がっていました。こどもにいろいろな経験をさせてあげたいという気持ちをお持ちなんだなというのは、座談会の時にすごく見えました。しかし、そもそもお母さんたち同士のコミュニケーションもなかなか取りづらいです。コロナもあるし、お母さんたち同士が集まれるような場所とかPTAとかも、檜葉町は今年からできて、富岡町と浪江町はまだありません。

**[鈴木]** PTAとか保護者会がまだないので、お迎えの時とかにすれ違う保護者さんとはあいさつをしたことがある程度なんですけど、そうじゃない限りは本当に、どんな人たちが同じく子育てしているかっていうのを知らないので。

**[小林]** 保護者を知らないですね。

**[鈴木]** これも課題のひとつに感じていることです。例えば保護者同士が集まって、遊ぶところどこに行ってる？とか、こどもたち遊ばせたいねって話ができれば状況は全く変わると思っているので、それが起きるように冒険ひろばで座談会をやったり、サロンをやったり、

こども食堂という地域の居場所を作ったりということをしています。しかし、現時点ではまだ保護者同士が話せる場所ってというのは本当に少ない。出会いがない状況ですね。

ー 避難解除になって公共施設ができてきたらコロナがきた、そんな感じですか？

[小林] それもあると思います。地域の人たちと保護者さんとこどもたちとで週末チャレンジ塾とか、運動会みんなと一緒に作っていかうみたいな感じの動きを18年、19年にやっていて、ちょっとずつ地域の顔が見えるようになってきたところでコロナになって、そこからもう地域の人と会えないという状況がここ2、3年続いています。地域活動がストップしてしまったというのは、だいぶ弊害にはなっていると思いますね。ただお母さんたちも気を遣ってお誘いしないような感じですね。

[鈴木] 全国的にそうですね。

[小林] もしかして気にしている人だったらあんまり誘わないほうがいいかなとか、一緒にごはん食べるのは気を遣わせちゃうかなとか。小さい町なので余計にそうなります。

[鈴木] そういう意味では、屋外での活動は意図的に増やしています。冒険ひろばがそうですし、こども食堂は屋内では密になってしまうし食事もするので、地域の方たちと畑の活動で野菜作りをしています。そのコミュニティはけっこうお父さんお母さんたちが集まってくれるので、そこから屋内での活動にこだわらない形で集まれるように工夫はしています。

[小林] もうすこし日常的に集まったり、日常会話をできる関係になったり、というのは思うんですけど。今はどうしてもピンポイントに呼び掛けて集まってくる形が多いです。それがもう少し日常的になってくると、さっきおっしゃっていただいたような子育てサークルとか、親たちこどもたちと地域の中でのバーベキューやるとか、小さいこども会みたいなのがでてきたらと思うんですけど、まだそこまでいっていないという感じですね。

[鈴木] 道のりが遠そうだなって思います。

[小林] ちょっと遠いな、でも仕掛けていきたいなっていう感じでやっています。

後編につづく。